様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ９ 月　 ５ 日現在

機関番号：３４５０９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５３８０９６９

研究課題名（和文）合宿プログラムにおける「心理的コミュニティ」が不登校の改善に及ぼす影響

研究課題名（英文）The influence that "the psychological community" in the accommodation program gives to non-attendance improvement

研究代表者
難波　愛（Namba, Ai）

神戸学院大学・人文学部・講師

研究者番号：９０３６８７４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：不登校の子どもと保護者を対象とした宿泊プログラムを研究フィールドとして、参加前後における心理的状態を心理尺度および自由記述を用いて調査した。その結果、子どもについては参加前よりも後で心理的エネルギーが上昇し、さまざまな活動に対して意欲が現れていることが明らかになった。保護者についても、不安や緊張といった自覚症状が緩和され、保護者がお互いにサポートし合う心理的コミュニティが形成されていることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：The accommodation programs for non-attendance children and their family were surveyed and investigated a psychological state before and after the participation using a psychology standard and a free description.
As a result, psychological energy rose about the child later than before participation, and it became clear that will appeared for various activity.About the protector, subjective symptoms such as uneasiness and the strain were relaxed, and it developed that the psychological community which a protector supported each other was formed.

研究分野：臨床心理学

キーワード：不登校　合宿プログラム　子どもと保護者　心理的コミュニティ　自然体験　発達障害　心理状態の改善

１．研究開始当初の背景

わが国における不登校児童生徒数は、平成13年度に13万8千人と過去最高を記録して以来、平成22年度においても11万4971人（文部科学省発表）と憂慮される事態にある。不登校児を対象とした支援の一つとして、体験活動やキャンプは古くから行われているものの、その研究の裾野は広がっているとはいえない。先行研究のほとんどは、量的分析の手法、または横断的研究手法をとっているため、個人の心理・行動の変化を重視する心理臨床学的見地による質的分析及び縦断的な経過を追った研究は小田ら(2010)にとどまる状況にある。また、心理的コミュニティに着目した研究はほぼ皆無であった。

２．研究の目的

本研究では、近年増加している発達障がいを抱える不登校児とその保護者、および子どもを直接支援するボランティアスタッフを対象として、(1)1年間の継続的参加による子どもの心理・社会的側面の成長についての調査、(2)保護者の心理的安定と連帯感の形成に関する調査、(3)ボランティアのストレス状態と達成感に関する調査を行い、不登校問題の対策に役立つ要素解明とそのポイント周知を目的とした。

研究者らはこれまでに、基礎調査として子どもの気分の変化の把握、対人面、生活面における行動評定、保護者への面接、心理的安定感や対人関係形成の有無について調査を行い、成果を蓄積してきた。本研究では、近年増加してきた発達障がいの有無に焦点をあて、心理、社会面の変化、保護者自身の子どもを見る視点に違いがあるかどうかを検証する。また支援スタッフのボランティアの経験回数によって、メンタルヘルスや成果の実感に差があるかどうかを調査する。

３．研究の方法

本研究計画では、(1)子どもの心理面、社会面、生活面の改善を実証的に研究する。
(2)保護者の子どもを見る視点の変化、保護者同士の連帯感の形成、親自身の心身の休息感と安定感について明らかにする。
(3)ボランティア学生のメンタルヘルス状態の把握と参加動機付けとなる成果の実感を明らかにする。以上 1～3 の研究を平行して行った。

子どもへの調査方法は以下の通りである。

a. 子ども自身の自己評価

①プログラムの事前と事後において、子ども自身に「心の温度計」と称する尺度に回答してもらい、相対的な気分の変動を測定する。
②振り返りの６項目（やりたかったことができた、他の人一緒に活動できた、また来たい等）を５件法で回答してもらい、自己評価を行う。

b.　ボランティアによる行動評定

①1 日の終わりに、ボランティアによって個別カルテに対人面（友だちと一緒にいることができた、自分からスタッフに話しかけた等11項目）および生活面（声をかけられれば挨拶をした、朝だいだい決められた時刻に起きられた等9項目）を3段階でチェックする行動評定を行う。
②記述式調査として、ボランティアとの関係、子ども同士の関係、プログラムへの参加の仕方、保護者との関係について記述する。
＊毎年同じ調査を行い、経年変化を比較するためのデータとする。

保護者への調査は以下の通りである。

a. 不登校状態を把握するための保護者への個別インタビュー

臨床心理士である申請者らが、初参加者の保護者を対象に半構造化面接を行う。不登校の経緯や本事業への期待感や不安感、発達障がいや精神疾患の有無、医療機関受診状況、投薬の有無等について面接調査を行う。

b.　質問紙調査

各プログラム終了後に 13 項目から成る質問紙を配布する。項目内容は、プログラムへの参加の程度を測定する2項目（家族だけではできない体験を子どもと共有できた、自然とふれあえた）、子どもの見方や接し方の変化を測定する5項目（子どもの新たな一面を発見できた。子どもが生き生きとしていた等）、保護者同士の連帯感の形成に関する 3 項目（親同士の交流ができた。悩んでいるのは自分一人ではないと感じた等）、その他 3 項目から成る。
＊毎年同じ調査を行い、経年変化を比較するためのデータとする。

＊保護者へのインタビューが時間の都合や不参加等で計画通りに行かない場合には、次の参加時に調査できるよう、スタッフ間で申し送りをするようにする。無理強いのないように留意する。

ボランティアへの調査は以下の通りである。

a.　予備調査の実施

初年度の初期に実施されるプログラムにおいて、参加ボランティアに自由記述法でストレスを感じた場面の情報を収集する。

b.　本事業に即した尺度の作成

本事業の特徴である、一対一での対応が基本であることや、プログラムの合間に自由時間が多く設定されていることなどをストレスに感じるかどうか等をストレス尺度の項目に入れて、本事業におけるボランティア活動でのストレス状況を測定する。

c.　尺度の妥当性、信頼性の検討

初年度において本調査を実施し、データを統計的に分析して尺度の妥当性、信頼性を検討する。

４．研究成果

(1)調査協力者数について

平成 25 年度については、子ども 102 人（のべ）、保護者 68 人（のべ）が調査に協力した。

平成 26 年については、子ども 63 人（のべ）、保護者 37 人（のべ）が調査に協力した。
平成 27 年度については、子ども 54 人（のべ）保護者 34 人（のべ）が調査に協力した。

（2）子ども調査の結果

図 1 は、参加した子供の参加前後の気持ちの変化（差）を示したものである。いずれの回においても、プラスの値をとっていることから、プログラム参加前よりも後の方が、温度計つまり心理的なエネルギーが増加していることが分かる。この事から、子ども達は本プログラムに参加する事で、心理的なエネルギーをチャージする体験をしていると考えられる。

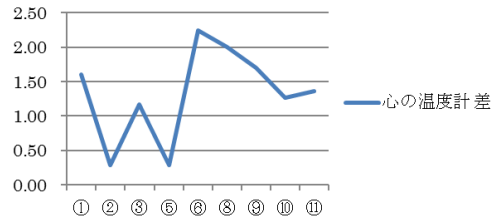

図 1 心の温度計（参加前後の差の平均値）

図 2～図 7 までは項目別に終了時の振り返り（平均値）の変化をグラフにしたものである。すべての項目を通して満足度は高く、ほぼ 3 以上を示していると思われる。

本図から考えられることとして、本事業は、年間を通しての継続参加者が多く、プログラムに慣れている子どもが多かったため点数が高くなったと考えられる。「普段できないことができた」「また来たい」が高い点数を示していた。また、「よかった事は何か」を尋ねる自由記述において「野外炊飯」「とんぼ玉作り」「餅つき」など普段できない事や皆で協力して行う行事が多く書かれていたこの事から普段家で過ごす事が多い子どもたちだが、支援スタッフを介して様々な体験ができたり、他者と交流したり、外で身体を動かす体験が子どもたちにとっても楽しい体験につながり満足度につながると考えられる。

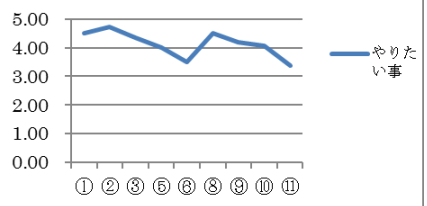

図2.やりたい事

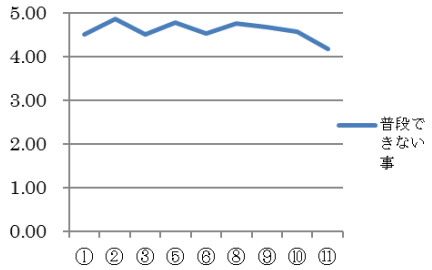

図3. 普段できない事

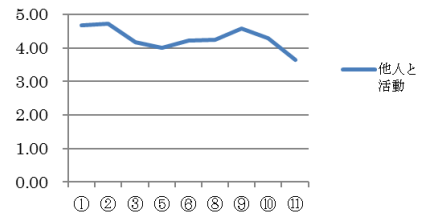

図4.他人と活動

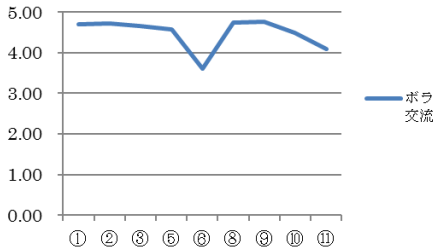

図5.ボラと交流

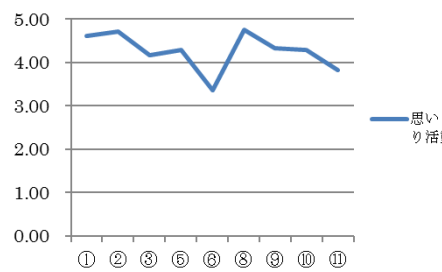

図6.思いっきり活動

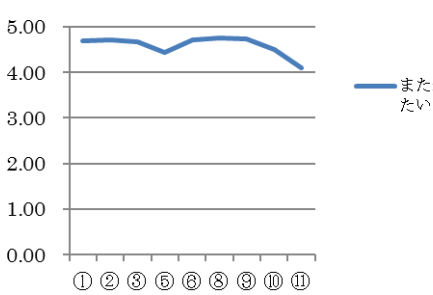

図7.また来たい

(3) 保護者調査の結果

図８は、保護者を対象に、プログラムの前後において質問紙調査によって気分得点を測定し、平均値を算出したものである。「元気がある」は反転項目である。すべての項目において、事前よりも事後の方が気分得点が改善されている。特に「緊張している」の差が大きく出た。保護者は、本事業に参加したことで、緊張や気持ちの暗さ、疲れた感じなどの気分状態が改善され、元気が出たということが明らかになった。

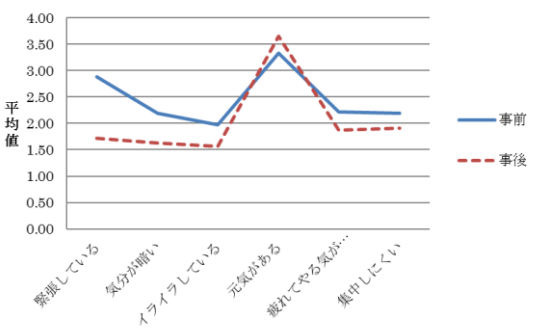

図8　気分得点の事前ー事後比較

図９は、旅に関する事後評価の各項目について、年間実施された全てのプログラムの平均値をとったものである。結果は、全ての項目が５段階評価で3.8以上と高い評価を得ている。最も評価が高かったのは、「子どもが生き生きしていた（4.49)」ついで「悩んでいるのは自分ひとりではないと感じた(4.47)」であった。

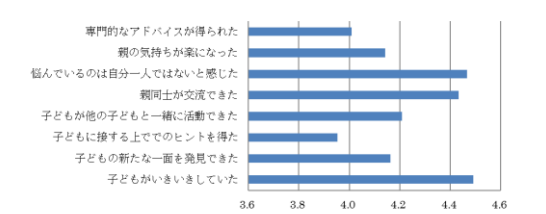

図9　保護者事後評価

(4) 考察

これらの結果から、保護者が本プログラムに参加することによって、気分が安定し心理的にエンパワーされたことが明らかになった。その要因として、1) 保護者がプログラムに同行することによって子どもとの間に適切な距離をもちつつ、子どもの様子を客観的にみることができる、2) 子どもを客観的にみることによって、子どもの新たな側面を発見することができる、3)プログラムの期間中に保護者同士が交流することによって「心理的コミュニティ」が生成され、自然発生的に保護者同士によるピア・サポートの関係が生じ、自助グループの様相を呈することが示唆された。

５．主な発表論文等

〔学会発表〕（計　7　件）

Ai Namba, Kzumi Togo, Naoya Iwata Masatsugu Ono, Yuichi Shinga, Yayoi Ymashita(2016)Research on the Effects of a Presidential Program on Out-of school Children and Their Parents-Insights Gained from Observation of Changes in Their Emotional States and Satisfaction Levels Over a Period of One Year-.ICP2016,(2016/7/25),Pacifico Yokohama,230.

東郷和美・小野真嗣・進賀友一・難波愛・山下弥生(2016) 不登校の子どもと保護者に対する宿泊型プログラムに関する研究第６報(1)－子ども調査から－.日本心理臨床学会第 35 回秋季大会,パシフィコ横浜（国際医療福祉大学）,発表論文集 p.596.2016 年 9 月

難波愛・小野真嗣・進賀友一・東郷和美・山下弥生(2016) 不登校の子どもと保護者に対する宿泊型プログラムに関する研究第６報(2)－保護者調査から－.日本心理臨床学会第 35 回秋季大会,パシフィコ横浜（国際医療福祉大学）,発表論文集 p.597.2016 年 9 月

難波愛・岩田直也・小野真嗣・進賀友一・東郷和美・山下弥生(2015) 不登校の子どもと家族に対する宿泊型プログラムに関する研究第 5 報(2)－保護者調査から－日本心理臨床学会第 34 回大会（神戸国際会議場/兵庫教育大学),発表論文集 p.636.2015 年 9 月

東郷和美・難波愛・岩田直也・小野真嗣・進賀友一・山下弥生(2015) 不登校の子どもと家族に対する宿泊型プログラムに関する研究第５報(1)－子ども調査から－.日本心理臨床学会第 34 回大会（神戸国際会議場/兵庫教育大学),発表論文集 p.635.2015 年 9 月

東郷和美・岩田直也・小野真嗣・進賀友一・難波愛・山下弥生(2014)不登校の子どもと家族に対する宿泊型プログラムに関する研究第 4 報(1)－子ども調査から－. 日本心理臨床学会第 33 回大会（パシフィコ横浜/東京大学）プログラム p.74.2014 年 8 月

難波愛・岩田直也・小野真嗣・進賀友一・東郷和美・山下弥生(2014)不登校の子どもと家族に対する宿泊型プログラムに関する研究第４報(2)－保護者調査から－.日本心理臨床学会第 33 回大会（パシフィコ横浜/東京大学）プログラム p.74.2014 年 8 月

〔雑誌論文〕（計　3　件）

難波愛・東郷和美・小野真嗣・進賀友一・山下弥生（2017）不登校の子どもと家族に対する宿泊型プログラムに関する研究第６報－平成 27 年度子どもと保護者への調査から－.神戸学院大学人文学部紀

要,37,67-74.
難波愛・東郷和美・岩田直也・小野真嗣・進賀友一・脇原華奈美・山下弥生（2016）不登校の子どもと家族に対する宿泊型プログラムに関する研究第 5 報－平成 26 年度子どもと保護者への調査から－.神戸学院大学人文学部紀要, 36, 209-217.
難波愛・東郷和美・岩田直也・小野真嗣・進賀友一・脇原華奈美・山下弥生（2015）不登校の子どもと家族に対する宿泊型プログラムに関する研究第 4 報－子どもと保護者への調査から－.神戸学院大学人文学部紀要, 35, 205-215.

６．研究組織

(1)研究代表者

難波　愛（Namba Ai）神戸学院大学 人文学部 人間心理学科 講師

研究者番号：90368746

(2)研究分担者　なし

(3)連携研究者　なし

(4)研究協力者（5 名）

岩田直也（Iwata Naoya）（旭川荘療育医療センター・臨床心理士）

小野真嗣(Ono Shinji)（神戸学院大学心理臨床カウンセリングセンター・臨床心理士）

東郷和美(Togo Kazumi)（岡山赤十字病院・臨床心理士）

進賀友一(Shinga Tomokazu)（玉野市教育委員会主査・臨床心理士）

山下弥生（Yamashita Yayoi）（河田病院・臨床心理士）